

研究ノート

基本的自尊感情理解のための小中学生用教材の開発

—フェルト製教材の作成と期待される効果—

近藤 卓¹⁾、山田 由美子²⁾、田渕 愛子³⁾、望月 美紗子⁴⁾

キーワード：基本的自尊感情・小中学生・教材

1. 問題の所在と目的

近年、小中学校をはじめとする学校現場で、児童生徒の自尊感情の低さが懸念されている（河地、2003）。また、それを学年間で比較すると、上級学年になるにしたがって下がる傾向が報告されている（近藤、2010）。

わが国で議論される子どもや青少年の自尊感情については、諸外国との比較で語られることもある（近藤、2010）し、かつて子どもであったおとなたちとの比較で語られることもある。いずれにしても、最近の子どもは自尊感情が低いあるいは弱い、といった言説がそこそこで合言葉のように発せられている。

一方で、この分野の研究における先進国であるアメリカでは、すでに“セルフ・エスティーム運動”とも言うべき状況が衰退の道をたどり始めている。セルフ・エスティームを高めれば学業成績が向上すると信じてきたけれども、そうはならなかったということが原因であろうとの議論がその背景をなしている（近藤、2012）。つまり、わが国で自尊感情に対する関心が高まってきたのと相反して、アメリカでは自尊感情に対して懐疑的な動きが出てきているのである。

自尊感情については、1890年のウィリアム・ジェームズ（James, 1890）による『心理学原理』以来、ローゼンバーグ（Rosenberg, 1989）やクーパースミス（Coopersmith, 1958）らの理論へと議論は連綿と続いている。ジェームズは、その著書“The Principles of Psychology”において自尊感情について述べ「自尊感情 self-esteem」＝「成功 success」÷「要求 pretensions」という公式で定義を行っている。

さて、ここであらためて、「自尊」を辞典（新村 1960）で引いてみると、「自ら尊大にかまえること、うぬぼれること」と「自重して自ら自分の品位を保つこと」と二つの意味が記されている。前者は、他者の存在を強く意識したときの感情であり、後者は自分自身の内的な基準に照らして、自分を保とうとする気持ちであると理解できる。つまり、「自尊」という語には二つの側面があるということになる。

1) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

2) 鳥取大学附属中学校

3) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科 3 年生

4) 東海大学大学院文学研究科

筆者らは、自尊感情には二つの側面があることを前提としており、上記のような日常的な意味での「自尊」の語の意味の二重性とも符合すると考えられる。こうした自尊感情の二つの側面を、筆者らは基本的自尊感情（BASE ; Basic Self-Esteem）と社会的自尊感情（Social Self-Esteem）と表現している（近藤、2010）。基本的自尊感情は、他者との比較や相対的な評価によるものではなく、いわば絶対的で無条件の感情として心の内に存在するものである。つまり、「生きていていい、このままでいい、これ以上でも以下でもない、自分は自分」といったように、ありのままに自分自身を受け入れる感情であり、他者との比較でなく、絶対的、無条件、根源的で永続性のある感情であるといえよう。

それに対して社会的自尊感情は、他者との比較によって相対的なものとして形成される感情であり、「とても良い、できることがある、役に立つ、価値がある、人より優れている」といったように他者の存在を前提としており、他者との比較で、どこまでも際限がなく、相対的、条件付、表面的で一過性の感情である。

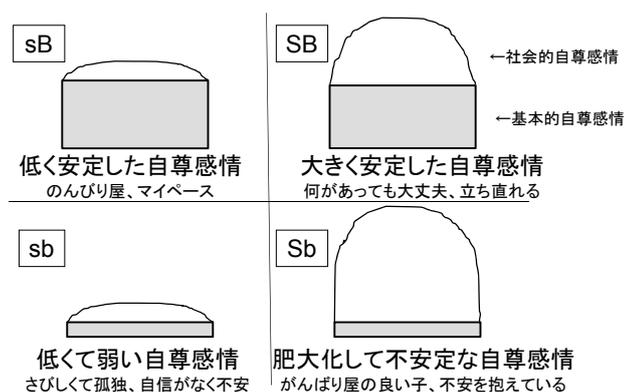


図1 自尊感情の四つのパターン

自尊感情を測定する尺度は複数存在し、もっとも広く用いられているものは、ローゼンバーグ(1989)の自尊感情尺度である。それに対して、筆者らは近藤(2010)の開発した自尊感情尺度 SOBA-SET を用いて、小中学生の自尊感情（基本的自尊感情と社会的自尊感情）の調査を進めている（近藤、2010）。

筆者らは、ただ単に自尊感情が低いということの問題性よりも、その内実としての基本的自尊感情と社会的自尊感情のバランスが重要であって、とりわけ問題なのは基本的自尊感情の低い状態であると考えている。

図1 でいえば、SB タイプが一つの理想形であって、sb タイプや Sb タイプなどの基本的自尊感情の低いタイプが心配される群である。とりわけ、Sb タイプは一見して高い自尊感情の値を示すが、その内実の大半が社会的自尊感情であることから、不安定で傷つきやすい自尊感情の状態であるといえよう。

そうした視点に立って、これまで筆者らは基本的自尊感情を育むための教育実践を、小中学校で展開してきている（望月、2013）。今回は、こうした教育実践で用いるためのフェルト製の教材の開発を企画した。数回の授業を受けた後に、教室など身近な場所で児童生徒が自由に触れながら、学んだ事柄を体感的に理解し深めていくことを狙いとしている。

2. 方法と内容

1) 方法

臨床心理学専攻の大学教員 1 名、中学校の養護教諭 1 名、臨床心理学専攻の大学院生 1 名、心理学専攻の学部生 2 名によってブレインストーミングを繰り返し、そこから得られたラフ・スケッチをもとに、フェルト手芸の専門家（注）に依頼して試作品を作成した。

2) 材料

教室などで児童生徒が自由に触れて、遊びながら学んだ内容を深めていけるように、安全性と耐久性を考えてフェルトを主要な素材として用いることにした。

3) 寸法

教室や保健室などの棚や机の上に設置しておける寸法とし、およそ高さ直径とも 30cm～50cm 程度とした。

4) 倫理的配慮

本研究は、教材開発のため特段の倫理的配慮は必要としないと考えられる。

3. 結果

SOSE を表現するためのパーツを、厚紙を用いて複数の形状で作成し、複数の色彩のフェルトで包んで仕上げた（図 2、図 3）。褒められたり認められたり評価されたりした際に高まる思いが、一つ一つのパーツによって表現されている。



図 2 SOSE の各パーツ



図 3 パーツの大きさ



図 4 SOBA-SET の全容 (1)



図 5 SOBA-SET の全容 (2)

SOSE のパーツは、ひとつひとつが「すごい」「やった」「認められた」「ほめられた」「勝った」「成功した」などの思いを表現している。他者からの賞賛や成功体験によって生じる感情であり、多種多様なレベルと種類からなっていることを、形や色で表している。これらのパーツを手にした子どもたちが、ほめられたり成功したりしたときのことを心に浮かべながら、一つ一つを SOSE の所定の場所に収めていくことで、そうした体験を思い出したりして、自分の自信 (SOSE) の根拠を確認していくことであろう。

また、BASE を表現するための円盤状のパーツを、スポンジを用いて 4 個作成し、BASE の積み重ねを表現するために、複数の色彩のフェルトを側面に張り付けて仕上げた (図 3、図 4)。共有体験の際に感情の共有ができると、その時の思いが積み重なって厚みを増していくというイメージで、明るく暖かい感情を暖色系のフェルトで、悲しさや辛さなどの感情を寒色系のフェルトで表現している。

4. 考察

1) 構想から具体化まで

これまで筆者らは科学研究費補助金による研究 (近藤、2012) などを多年に渡って進めてきた。その間、調査実施協力校であった A 中学校の養護教諭から、中学生が自尊感情と共有体験の学習を進める際に、具体的に手で触れる立体物があると、より実感をもって理解が深まるのではないかとの提案があった。

そこで、大学院生と学部学生および当該中学校の養護教諭らとブレインストーミングを繰り返し、最終的には手芸の専門家に依頼して試作品を作成しようということとなった。その際の検討の結果をまとめたものが、図 6 のラフ・スケッチである。

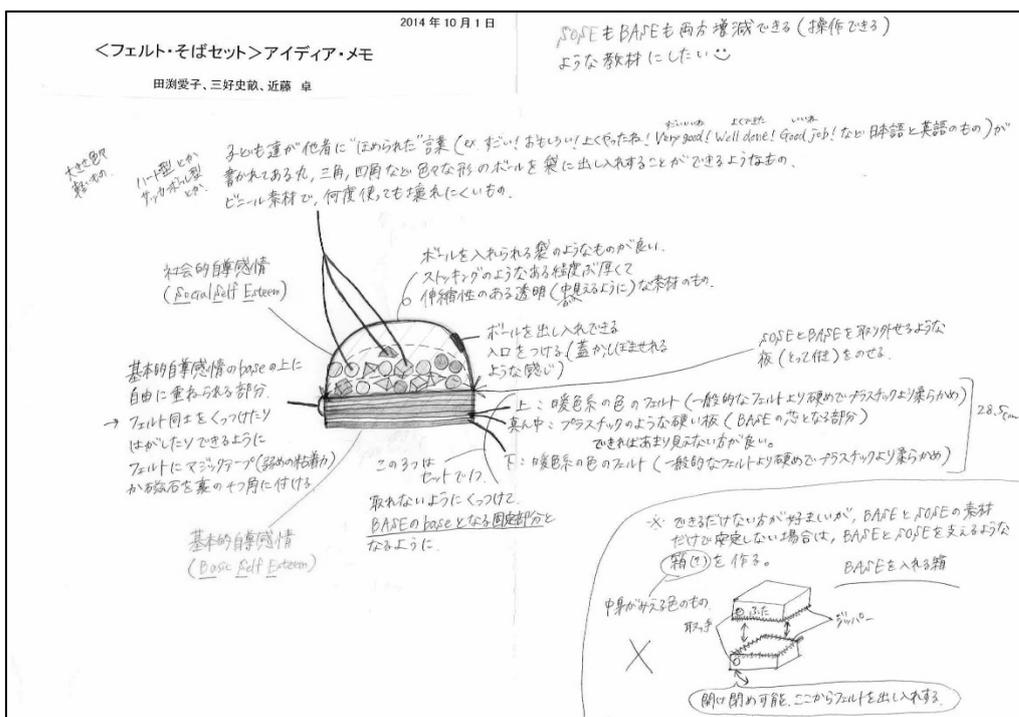


図6 ブレインストーミングをまとめたラフ・スケッチ

筆者らがこうしたブレインストーミングを重ねたうえで、2014年9月に手芸の専門家を訪問し、直接面談してラフ・スケッチ等を示しながら説明し理解を求めた。その上で、電話や電子メールでのやり取りを繰り返して、材料の選定や寸法などの詳細を詰めていき、4カ月後の2015年1月に実物（図2～5）が完成した。

直接面談の上での議論が1回のみであったことから、筆者らの意図が製作者に伝えきれない点があったと感じている。たとえば、SOSEはパーツが多数詰め込まれたのちに、大きく膨らんでいくことになるので、個数が現在の3倍以上の50個ほどは必要であったと考えられる。また、BASEは無数の共有体験の積み重ねによって形成されることになるので、現在の13色程度のものでは不十分で、少なくとも50色ほどは必要であると考えられる。

このように、初回の面談での打ち合わせの後、間接的な方法で準備を進めていった上で、最終的に詳細を詰める段階での、再度の直接面談での議論が必要であったのではないかと考えている。

2) 期待される効果

机上で学んだ自尊感情の成り立ちを、具体物で視覚と触覚を用いて体感的に理解を深めることが期待できる。授業そのものが、もともと「感情」という心のあり様、つまり目に見えないものを扱っており、さらには構成概念としてのSOSEとBASEの状態を理解させたいという意図で行われる。教育学や心理学において、さまざまな構成概念を学んだ経験のある学習者であれば、言葉による説明や図示したもので、十分な理解が可能かもしれない。しかしながら、それを中学生が理解するためには、やはりより具体的なものを活用することが有効であろうと考えられる。

そうした意味で、具体的には保健室での保健指導や、保健学習の授業での教材としての活用が期待できる。自信を失ったり揺らぎを感じて保健室を訪れる児童生徒は少なくない。そうした児童生徒と養護教諭が面談して、自らの心のありようを理解させたり、ひいては自信をつけさせたりするような活動が、初等中等教育の現場では日常的に行われている（山田、2014）。そうした保健室での日常の支援活動の際に、手遊びのような形でこの「フェルトそばセット」が活用できるのではないかと期待される。養護教諭と共に触れるだけでなく、保健室に同室した仲間と共に具体物に触れることによる共有体験の効果も期待できよう。

また、繰り返し触れることによる復習効果が期待できる。彩や大きささらには柔らかさなどから、常に目に触れる場所に設置しておけば、子どもの手が自然に伸びて触りたくなるような物となっている。おそらく、何度も手で触れてさまざまな遊び方をすることが想像される。そうした自主的・主体的な繰り返しの遊びを通して、自尊感情に対する理解がより深まり、確実なものとなって行くことが期待できる。

3) 今後の展望と課題

今回作成したフェルト教材を保健室や教室に設置して、児童・生徒がそれを用いて体験的に自尊感情を理解する機会を設定するつもりである。そのために、まず自尊感情の理解を深めるような授業を実施し、その後このフェルト教材に触れる機会を作ることで、その

理解がさらに深まることを確かめるような介入研究を 2015 年度に計画している。

まずその前段階として、2014 年度中においては、保健室や教室に一定期間設置して自由に生徒が触れる機会を作り、そこでの印象や感想を半構造化面接法で聞き取るとともに、参与観察法によってともに教材に触れながら、生徒の反応をつぶさに観察することとした。

※本稿は、2014 年 1 月 10 日に開催された日本学校メンタルヘルス学会第 18 回大会において、共著者の田淵愛子が筆頭発表者として山田由美子、望月美紗子、近藤卓の計 4 名の連名で研究発表を行った内容に、加筆・改稿を施したものである。

※本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「子どもの死の認識と自尊感情を育む教育プログラムの開発」(平成 25、26、27 年度)によって進められている研究の一部である。

【注】

手芸の店 おがわ ; www.syugeinoogawa.com/

【文献】

Coopersmith, S. (1958). Determining Types of Self-Esteem. *Journal of Abnormal and Social Psychology*. **59**, 87-94

James, W. (1890). *The Principles of Psychology*. Dover Publication, Inc.

河地和子 (2003). 自身力はどう育つか～思春期の子ども世界 4 都市調査からの提言. 朝日新聞社

近藤 卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学. 金子書房

近藤 卓 (2012). 科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 ; 子どもの死の認識の発達に関する研究.

望月美紗子 (2013). 自尊感情を育てる実践～自尊感情を育てる授業に取り組んでみよう！ ; 子どもの自尊感情をどう育てるか. 金子書房

Rosenberg, M. (1989). *Society and the Adolescent Self-Image*. Wesleyan.

田淵愛子 (2014). 基本的自尊感情理解のための小中学生用教材の開発. 日本学校メンタルヘルス学会第 18 回大会抄録集, p67

山田由美子 (2014). 基本的自尊感情を重視したいのちの教育～年間計画にどう組み込むか ; 基本的自尊感情を育てるいのちの教育. 金子書房